

J-Press 号外 がいばろ宮城

支援物資トラック2台分を届けてきました!

3月17日木曜 19:00
名取二中



母校でボランティア 避難所の中学校で生徒が組織 宮城・名取二中



炊き出しに使う野菜を洗う生徒たち。
3月下旬(当時)とはいえ、まだまだ水は冷たい。

仙台市内の高校に通う引地さんは、同じく大津波の被害を受けた塩釜市に高校の同級生が住んでいることもあり、「震災から1週間は自分の身近な人の安否確認に走り回っていて、他の人を気遣っていらなかった」(引地さん)。

幸い同級生とは連絡がつき、被災した人のために何かしたいという思いにかられ、参加を決めた。

被災者と同じ悲しみを抱え、ボランティアに参加した生徒もいる。卒業生の阿部えみりさん(15)は、今回の大津波で遠縁のおばさんを失った。親族みんなで探し回ったが再会は果たせず、震災発生の数日後、遺体が見つかった。「もっとつらい思いをした人がたくさんいる。私だから分かり合えることや、できることがあると思う」。阿部さんは笑顔を見せ作業に戻った。

不幸にうちひしがれ、口数も少なくなりがちな避難所。同市閑上で被災した三浦信江さん(73)は「家や故郷を失ったことが心細くてたまらなくなるが、生徒たちが話しかけてくれるとほっとする」と話す。明るさを失わない生徒たちの活動は、被災者にとって大きな力となっている。

2011.3.25 WEB版産経ニュースより転載

Kizuna
絆

東日本大震災から25日で2週間が経過し、いつ終わるとも知れない避難所生活を続ける被災者には疲労の色が滲(にじ)む。宮城県内の避難所のひとつ、名取市立第二中学校では、生徒たちやOBの熱意が行政を動かし、ボランティア組織が立ち上がった。若いパワーが被災者たちを元気づけている。(石井那納子)

「二中でボランティアをしませんか」

震災発生直後、こうしたメールが同校の在校生や卒業生の間に回った。生徒が続々と呼びかけに応じて集まったことから、市社会福祉協議会では「名取市災害ボランティア」を立ち上げ、現在までに70人以上がボランティアとして登録を済ませた。

この避難所には、大津波による被害が激しかった閑上(ゆりあげ)地区や下増田地区をはじめ、福島県相馬市などから避難してきた171人が身を寄せている。

生徒たちは被災者とラジオ体操をしたり、避難所内の掃除や小さな子供たちの世話をする。昼食時の配給では、サンドイッチや牛乳を渡しながらか「まだお代わりできますよ」と積極的に声をかけると、笑顔を見せる被災者もいた。

ボランティアに参加する生徒たちも今回の震災について、さまざまな思いを抱えている。同校の卒業生で、高校1年の引地拓さん(16)は「自分のことだけでなく、まわりの人の力になりたい」と話す。

